

生活が安定した。昭和六十三年、八十八歳で病没したが、内海航路の小型船で赤道を越えたこと、補給が途絶えてからのラバウルでの自給自足の生活に耐えたことを語っていた。父の負傷も、海水による製塩作業中のことであつたことを知つた。

私たち一家が北朝鮮に渡る切つ掛けとなつた大伯父は、昭和二十四年、六十五歳で病没した。明治十七（一八八四）年生まれで、日露戦争に従軍し、朝鮮、満州に出征した。この経験が、明治末期に渡鮮する切つ掛けになつたのかもしれない。羽振りの良かった時代には村の社の建立にあつて多額の寄付をしたらしく、玉垣に大きく「朝鮮何某」とあり、子供のいなかつた大伯父の墓石代わりとなつている。

戦後六十年を振り返るとき、痛恨の思いは、ただ一人病弱のために避難行に加わることができなかった、大伯父の妻（当時五十八歳）のことである。その最後は知るすべもなく、今はただ冥福を祈るのみである。

## 十歳の記憶

—我が心の風景—

群馬県 伊藤好恵

太平洋戦争が終わつた昭和二十（一九四五）年八月、私は十歳を迎えたばかりでした。今では、歴史の一齣（まは）になろうとしているあの戦いの記憶は、人々の心から消えようとしています。昭和十六年十二月八日、日本からハワイの真珠湾への奇襲攻撃によつて、戦争の火ぶたは切られました。三年半余りの戦いは沖縄、広島、長崎などはもとより、多くの犠牲を出して、昭和二十年八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾しました。あれから六十年、この歳月は人々の心を十分に癒したのでしょうか。今では時代の変化と共に、かつて日米間に戦いがあつた事実をも知らない人が増えてきているようです。

思い起こせば、戦争が終わつて十年も経つたこ

ろでしようか、学生だった私は一つのメロディーと再会しました。それは、ロシア民謡「カチューシャ」の歌です。ちょうど、関鑑子さんの「歌声運動」の最も盛んなころで、学生の集う所にはいつも「歌声」があふれていました。私にとつては、耳慣れたメロディーとリズムです。終戦直後の街路に、ソ連兵の集団から聞こえていた歌声でした。言葉こそ違え、確かにあの曲をみんなが歌っていました。

昭和二十一年四月、私たち一家は、北朝鮮の元山から三十八度線を越えて引き揚げました。昭和の初め、父は税務署勤務、母は教師をしていて、父の転勤に伴って渡鮮したそうです。元山、群山（私は群山府大和町で生まれました）、永興、そして再び元山へと転勤を繰り返して、税務署長としての恵山鎮への転勤を機に、子供たちの教育を考えて退職したそうです。その後は元山里に造船会社を立ち上げていて、私たちも港に入った大きな船や、魚の荷揚げを見に行くこともありました。特

に毛蟹や鰯などは、吠で家庭に運ばれるほど豊富に取れていた時代でした。そして、夏になれば白砂青松そのものの松涛園で、兄に泳ぎを習ったり、母と一緒に蛤を拾ったり、とにかく開戦までありふれた平凡な暮らしだったと思います。

振り返ると、戦争にまつわる最初の心象は、昭和十七年二月のシンガポール陥落に伴う旗行列の賑々しさにあります。当時は、その背景の何たるかをも知らず、その日は幼稚園を休んでいて、旗行列に参加できずに残念な思いをしました。そして、「椰子の木の葉かげ」という南方の美しい絵物語の本を、とても大切にしていた記憶があります。

昭和二十年、終戦当時の私は元山泉町公立国民学校の四年生で、銃後を守る健気な少女だったと 생각합니다。「九軍神」や「特別攻撃隊」「アツツ島玉碎」など、命を代償とした皆さんの軍歌に背を押されるように、「ほしがりません勝つまでは！」「進め一億火の玉だ！」「勝ち抜く僕ら少国民！」等々を標榜として暮らしていました。さら

に、四年生になれば教育勅語も諳そらんじられるようにならなければならず、慌ただしくも凜とした日々でした。

例えば、金曜日は「軍事教練日」と定まっています、号令と共に行進の練習があつたり、教員室の出入りにも「〇年〇組、だれだれは〇〇先生に用事があつて参りました」とか、「復唱！」等を大声で言う規則になっていました。また、両陛下の御真影が安置されていた奉安殿の前では、必ず最敬礼をすると決められていました。講堂で式典などの行われるときは、白手袋に礼服姿の先生によって御真影が運ばれ、私たちの前を通るときには、決して頭を上げてはいけないことになっていました。

入学以来、学校での唯一の遊び場所は、この奉安殿のすぐ横にあつた総合運動施設でした。肋木や吊り輪や滑り台など、わずかな時間での一つ一つの器具への挑戦は、子供なりに達成感が味わえて楽しかったものです

そんな中でも、物資不足は深刻でした。ズック靴一つを求めるにも、学級に配給された一、二足をくじ引きで決め、しかも同一家族に重複しないという不文律がありました。放課後はグループごとに戦地の兵隊さんへの慰問袋を作ったり、私自身は黄色い連翹れんぎょうの咲く裏門を通つて、学校のすぐ上にあつた元山神社に「必勝」と「武運長久」を祈つて、日参を続けていました。また、学校行事としての松根油掘りにも行きました。しかしこればかりはいかんせん、子供たちの手には負えず、近くにあつた修道院のドイツ人神父さんに手伝ってもらつたりしました。姉たちも毎日動員で元山航空隊に通い、偽装網作りに精を出していました。そのうち空襲警報の回数も増え、B 29 追跡も空しく、日の丸のついた飛行機が落ちてゆくのを目にすることもありました。緑町の我が家は、比較的線路に近かつたので危険だという理由で、新豊里の方に疎開することになりました。いつのころからか学校には、兵隊さんたちが常駐するように

なり、低学年は午前中、高学年は午後登校するということになりました。

当時の家族は父、母、京城（ソウル）の大学予科に在学中の兄、元山師範の姉、そして四歳と一歳の弟妹と私の七人家族でした。新豊里には家を新しくして移ったのですが、その家に住んだのは終戦までのわずかな期間でしかありませんでした。やがて、ソ連の参戦によって時間を切つての空襲も多くなり、夜中に鳴るサイレンの音や爆弾、焼夷弾の炸裂する音、それに伴う爆風や飛び散る破片に怯える日々になりました。私たちは近所の人と一緒に、近くにあった大きな鉄筋の橋の下に、簡単な寝床を拵えてそこで生活するようになりました。このころになると避難のためか、夕方から夜にかけて、荷物を持った多くの朝鮮の人たちが列をなして、山の方に入って行く姿が見られたものです。

そのころの生活の様子を、「十歳の夏」と題して後日に認めた私の詩があります。

熱風と火薬の臭いが遠のいて

わたしたちは地上に出る

五時間だけは安心して戯れ

ご飯を食べる

戦く奥歯をぎゅつと噛んで

星空の美しかったこと

終戦の日は、朝からよく晴れた日でした。雑音の多かった重大な「玉音放送」があつてからは、少し遠いこともあつて、あの赤煉瓦造りの泉町国民学校の門を、再びくぐることはありませんでした。そこは、すぐにソ連軍の病院になつたのとこのでした。

そのころの出来事は、あまり鮮明には思い出せないのですが、共同の洗い場でよく食器などを洗っていたおばさんが、「二人息子を戦地に送り、犬死にさせてしまった」と、涙を流しながら無念の歎息たんそくをしていた姿が、今も心に残っています。

兄の思い出によれば、八月十九日に西本願寺住職のご子息、三谷好憲さんと一緒に、京城から汽

車に乗って元山に戻って来たそうです。兄が、京城からそのまま日本に帰国せずに、危険が予想される中で北上して元山に帰って来てくれたことは、その後の我が家の「全員無事帰国」への大きな力となりました。

やがて、戦いに敗れた民草の悲惨な生活が現実のものとなってきました。風に乗って聞こえてくる「マンセイ！ マンセイ！」という声高の響きは、新しい国旗を先頭にした朝鮮人たちの歓声でした。母と一緒にいった銀行も、既にソ連兵に囲まれて、出入りも封鎖されていました。そのうちに、外出することもだんだん危険になってきました。間もなく朝鮮人によって組織された保安隊ができ、今まで指導的な立場にあった日本人や、警察関係者などは次々と拘束されてゆきました。昨日までの立場とはまさに逆転してしまい、日本人家族は、刑務所への食事の差し入れに通うようになりました。そして、今まで無敵の力を誇っていた憲兵隊の人たちの、武装解除された姿にも会い

ました。行方定まらぬ逃避行だったのでしようか、軍服姿の人たちが、水を求めて井戸の周りで休息をしていました。上官だったらしい人の命令的な指示に対して、何人かの兵隊さんが、今にも飛び掛らんばかりの態度をとって、反抗的な言葉で応答していたところを見た思いもあります。

また、あるときは、地下足袋を履き、狂人を装った脱走兵と思われる人にも会いました。その人は、そのころには全くお目にかかることのできなくなっていた石鹼や砂糖をたくさん持っていて、山に隠しているから、今度持って来ると言っていました。二度と現れることはありませんでした。あの人たちは、果たしてその後無事に日本の土を踏んだのでしょうか。時々思い出すことがあります。

最初に元山港から上陸して来たソ連軍は、囚人部隊だったということでした。私たち日本人が一番驚いたのは、青い刺青と、腕の付け根から手首まで、腕時計をびっしりとはめていたことです。

そして、夜昼を問わず集団でやって来ては、土足のままに家上がり込み、銃を発射したり、拳銃を突きつけたりしての略奪でした。若い女の人たちは、防空壕として掘られた山の横穴に隠れたり、髪を短く切って男装したり、顔に墨を塗ったりして、女であることを隠しての生活でした。私たちは小高い丘に上がって、はるか向こうからソ連兵の乗った緑色のトラックがやって来ないかと、見張り役をしていました。いざというときは、みんなバケツをたたいたり、大声で知らせに走ったりして警報を発して、それを聞いた家々の人たちは戸締まりを頑丈にして、声を出すことをせざるに家の中に隠れていました。

そんな日常生活の中、絶やすことなく心の火を灯し続けた、光る思いもあります。山口さんという、少し年配のお姉さんから「旅愁」という歌を教えてもらい、みんなで声を合わせて歌ったことです。軍歌ではない歌、祈りにも似たメロディ、そして望郷への憧れの歌、これは後に教科書

にも載っていた歌ですが、その後の私の人生においても、心の中で忘れられない一曲となりました。秋になったころは、我が家は住み慣れた自分の家を追われて、初めて知り合った桑原さん一家と、狭い家での二所帯の生活が始まっていました。ソ連兵の傍若無人な振る舞いも、少しずつ間遠くなっていました。父と兄は、ソ連軍の使役として毎日駆り出されていました。仕事は、重工業の機械類を解体して、ソ連の本国向けの船に積んで送り出す仕事でした。そのころは、どこも食糧不足となりました。我が家でも、時々母と姉が調達に出掛けていましたが、日本人が市場へ出入りすることは禁止されていました。食糧のほとんどは、知り合いの朝鮮人などによる差し入れや仲介で、父の衣類、母の着物や帯、そして毛皮のマントなどめぼしい物は、次々と米や粟、そして高粱や大豆糲などの食べ物に替わってゆきました。

母と姉が出掛けた後は、私と弟妹三人での心もとない留守番でした。「いざというときには、二人

を連れてどう逃げたらいいのか？」とか「どうぞ、何事もなくみんなが無事に帰って来ますように！」と、オンドルの部屋で布団にくるまりながら思い巡らせていました。このころにはもう何となく、生きとし生ける者の命の悲しさを感じていたのかもわかりません。

そんな中で、国境に近い、またソ連軍と攻防のあったという羅津、羅南、清津方面からの避難の人たちの生活は、一段と大変だったようです。収容されたお寺や遊廓での不自由な生活に加えて、栄養失調や病気によって亡くなる人たちのうわさが伝わってくるようになりました。

あるとき、私たち子供は「たばこ売り」をすることになりました。どんな経緯だったかは知りませんが、我が家にもたばこの葉が束になって持ち込まれてきました。母や姉と共に、葉に霧吹きをして細かく刻み、それを巻き紙に乗せて一本一本くるくると巻いていくのです。巻き紙には、コンサイス辞典を一ページずつ切り取って、それで巻

いていくのです。十本ずつくらいを束にして厚紙の箱に入れ、公園の広場などに売りに行きました。「売れた」のか「売れなかった」のかあまり記憶にはありませんが、私はこの広場でとても大きな衝撃を受けました。かつて緑町にいたところに、近くに住んでいたO君とお母さんを見掛けたのです。多分、一年くらい前に、お父さんの転勤で羅津の方に引越して行かれた一家でした。苛酷な避難生活に耐えておられたのでしょうか、人違いではないかと思うほどに痩せて、面変わりされた姿を見て胸を突かれてしまい、目を合わせることも憚られて、隠れるようにして帰ったことを覚えていません。

寒くなると、朝鮮の人たちに頼まれて、セーターや手袋などを母に教わりながら編むことになりました。ときには弟妹のお守りをしたり、燃料用の無煙炭を、竹の筒を使って団子にして、筵に干したりするのが私の仕事でした。

そんなある日、またまた忘れかけていた、いや

な出来事が起こりました。人の気配に振り返った私の前を、赤ちゃんを抱っこしたままのMさんの小母さんが、ソ連兵に銃を突きつけられて、無理矢理連れて行かれました。ただただ硬直してしまっていた私を覚えてはいます。随分経ってから、小母さんだけが帰って来られたということでした。

そのころの私たちの住まいの後方にスキー場がありました。そこはソ連兵たちの訓練にも利用されていました。雪山に実弾射撃の音が終日響き、号令と行進、そして演習の行き帰りには、「カチューシャ」の歌声と足音が聞こえていました。ある日、窓の隙間からそっと覗いて見ると、号令を掛けていた上官らしい人が、真っ赤なハンカチを取り出して「シュン、シュン」と鼻をかんでいる様子が見えました。銃を肩に掛けて立っている一団の兵隊たちとは、何となくちぐはぐな感じがしていました。

一方、近くの山は、亡くなった方々の遺体の埋葬場になっていました。遺体は大八車で運ばれ、

夏のころには死者への手向けとして、お線香や遺体を包む毛布などを提供する人もありました。このころ、子供たちは集まると、見たこともない「幽霊」の話を実しやかに話し合っていました。秋から冬へだんだん寒くなってくると、埋葬される数も増してきて、どうしようもなく無関心のような状態になりました。そのころには、もう死を悼む心は閉ざされてしまっていたのかもしれませんが。通りがかりに恐る恐る目にしたのは、亡骸がむき出しになっていて、白い足が大八車の軋みに揺れながら遠ざかって行く情景でした。冬になれば、氷点下十度を超える極寒冷地での埋葬は、今考えてみても大変な作業だったと思います。人手も少なく、薄陽差す雪山の斜面には、凍土を溶かすための火煙が一日中上がっていたこともありました。

私たち一家の帰国については、それまでも聞かされた話などもあったようですが、正確かな要素も多く、雪解けの始まったころ、歩いて元山を後にすることになりました。出発は、三月



二十日過ぎの早朝だったと思います。

私は、かねてから家を後にするときは、これだけは是非持ち出したいと心に決めていた物がありませんでした。押し入れの隅に集めてきた「千代紙」です。ときどき取り出して見ていると、その色の美しさと細やかな模様は、私の心に夢の世界を与えてくれました。しかし、結果的には出発の慌ただしさに紛れて忘れてしまい、後々心残りになっていました。考えてみると、たとえ忘れず持ち出したとしても、到底無事に日本まで持ち帰ることはできなかつたことでしょう。

いよいよ各人が身につけられるだけの物を着込み、下着類にはそれぞれお金を縫い込み、リュックサックを背負つての旅立ちでした。父と兄がお米など重たい物を持てるだけ持ち、母と姉は妹と荷物を交代で背負いました。私は、リュックサックに妹のおむつと在学証明のための通知表類、一番下に預貯金の通帳などを入れて背負い、五歳になつたばかりの弟の手をしっかりと握つての脱出行

となりました。出発時の同行者は、同じ屋根の下で暮らしていた桑原さん一家と、我が家の総勢十二人でした。歩くほどに、三々五々と集まつて来る脱出行の人たちとの合流があつたりで、人数はどんどん増えていきましたが、途中での朝鮮人保安隊の長時間に亘る検問や、ソ連兵の銃声からの逃げ惑いなどがあり、五、六十人ぐらいの人たちが離散を繰り返すうちに、別々になっていきました。

特に、検問に遭うときどきしました。体格の良かった父が目立つたのか、代表のように引つ張つて行かれ、背広や持ち物などを取り上げたり、時間をかけて詰問されたりしていたからです。私たちは父を待つ間、兄がリュックサックに入れていたドイツ語や英語の辞書、そして大切にしていた友人や家族の写真などを、細かく破つて雪の中に埋めたりしました。

春浅い三十八度線への山道は、泥んこや残雪に足を取られながらの逃避行でした。私たちは身軽になるために、だんだん必要最低限の食糧と妹の

おむつ以外の物は捨てて歩きました。道にあぐねたときや歩けなくなるとき、見上げた木々の枝には、先に通った人たちによって残された紙の道標がありました。不安と疲れにさいなまれていた私たちにとつて、それは無言の励ましと大きな慰めのエールとなりました。

あるときは、山の中で小さな命の「死」との遭遇もありました。その日は朝から粉雪の舞う寒い日で、たまたま行き合った集団の中に、小さな赤ちゃんを連れた若い女性がいました。彼女は途中から列を離れ、赤ちゃんを抱きしめたまま、じつとわずくまつて動かなくなりました。同行の人たちはひそひそと話し合っていました、やがてみんなしやがみ込んで待機の状態になりました。みんなは、心を痛めながらも暗黙の了解だったのでしようか。赤ちゃんを助けるための何の手立ても術も無かったです。私もしんと張り詰めた空気の中で、鈍色の空から落ちてくる雪を見上げながら座っていました。悲しくて諦め切れなかつ

たのでしよう、彼女は息絶えた赤ちゃんをそのまま再び背負つて、次の日もその次の日も歩きました。しかし、三日目に遭った検問ではどうしても通してもらえず、とうとう埋葬することになりました。出発の朝、名前も顔も知らない赤ちゃんでしたが、山の中の小さく土盛りされたお墓に、みんなは手を合わせて別れをしました。

途中、私たちがとても困ったことは、母が足を痛めて歩けなくなったことでした。わずかになつた荷物はもちろんのこと、妹を背負うことも叶わなくなり、父と兄が肩を貸したり背負ったりしての山歩きとなりました。ときには、現地の屈強な青年にお願ひしたこともありました。幼い弟も、足を引きずりながらも毎日の強行軍に頑張つて歩いていましたが、父や兄や周りの大人たちがどんなに機嫌を取ったり励ましたりしても、「もう歩けない」「いやだ」と泣き叫び、どうしても動こうとしない時がありました。父もつらかつたと思いますが、止むに止まれず叱つたり手を上げたりし

たのを、切なく思い出します。私も、半ペソをかきながら弟としつかり手をつないで歩きました。幼い子供といえども、自分の足で一歩ずつ前へ進まない限り、日本に帰ることはおろか、明日のとさえ考えられなかったからです。

特に平地や道路に近付くことは危険でした。ソ連兵などに見付からないよう、話し声はもちろん、子供の泣き声にも注意しなければなりませんでした。あるときは、危うくソ連兵たちが乗っているトラックと遭遇しそうになり、急いで丈の高い叢くさむらの陰にじつと隠れて、難を逃れたこともありました。また、突然のロシア語と銃声が近付づいてきて驚かされたこともあります。もし見付かって銃を向けられたら、と思うだけでも身がすくんだものです。そしてその間、方向を見失ったり道に迷ったりしたこともありました。そんな時、案内人として雇った朝鮮人に、わざと違う道に連れ込まれたり、橋を壊して通行を絶った川岸に案内されたりして、無駄な時間と労力を費やし、呆然

としたものです。しかし、反対に親切な朝鮮の人に導かれたこともありました。方々から南下して来る日本人との出会いによって、何となく運命は開けていました。

あるときは、やつと一夜宿を借りることのできた農家のオンドルに、喜びながら休んでいたら、南京虫の大群に襲われたこともありました。久しぶりに、暖かいスープを口にできてほっとしたのも束の間、一晚中痒くて眠れませんでした。脱いでみて初めて見る小さな虫の行列に、ぞっとしたことを覚えています。ほとんど着の身着のままだった私たちでしたが、その後どんな処理をしてしのいだのか、記憶の中にはありません。

いよいよ三十八度線に近くなり、目前の川を渡って国境を越えることになりました。銃を構えた監視人がいるので、闇夜に乗じて川に入り、こっそり向こう岸へ渡らなくてはならないということでした。幼い子供連れで、大人の腰ぐらゐまではあるという川の流れを渡ることは、かなり勇氣の

いることでした。しかし、これまで目指してきた国境へやっとたどり着いての、最後の難関と覚悟をしていましたので、だれも躊躇したりひるんだりすることはありませんでした。

何人かずつのグループに分かれて、それぞれお金を出し合い、国境越えを案内する朝鮮人が雇われました。後で分かったことですが、彼らは各自それぞれの方法で三十八度線越えを指示していたようです。しかし、彼らの案内はあくまでも川岸までとなっていました。夜中になるのを待って、合図によって出発しましたが、私たち子供連れへの配慮もあつてか、指示されたのは以外にも船でも冷たい川の中でもない、橋を渡つての国境越えでした。その時はみんな夢中で、かなりの恐怖と緊張の連続でしたが、後で考えてみると、危機感とは裏腹なまことに呆気ない突破行ではありませんでした。私たちより先に突破し、岸に到着していた人たちの中には、川を歩いて渡った人も多くいて、寒さに震えていました。着いた所は、「高浪浦」と

いう地名だったと記憶しています。そこから長湍まで歩きましたが、国境を越えてだれもが一安心し、足も軽くなっていたと思います。

それからは、ちよつとした開放感と明るい陽差しの匂いに、気持ちも満たされていました。萌黄色もえぎの服を着たアメリカ兵から、息もつけないほどのDDTの洗札を受けて、私たちは有蓋貨車に乗せられました。兄の話によると、竜山から釜山へ向かったということですが、途中大邱辺りですばらくの停滞があつて、その翌日にやっと釜山に着きました。

釜山には、一箇所に集められて帰国船を待つ、たくさん日本人があふれていました。順番待ちのためしばらくは滞在するということで、慰安のための演芸会などが、賑やかに催されていました。ところが、落ち着く間もなく私たち一家は呼び出されて、思い掛けないことに引揚船「興安丸」に乗り込むことになりました。これは、足を痛めて歩けない母のために配慮されたものらしく、船室

の最上階に家族だけの特室が用意されていました。床板もむき出しの何も無い部屋でしたが、食事も運んでもらえる待遇でした。お米がほんの少し浮いているようなお粥でしたが、これは乗船者みんな平等だったと思います。それでも、久しぶりに家族だけの時間が持てたことは、言葉では言い尽くせない安ど感がありました。

出港後は大した船酔いを感じることもなく、翌日か翌々日の午後だったか忘れましたが、「興安丸」は無事山口県の仙崎港に入港しました。人々は、甲板に並んで憧れの日本、内地の景色を眺めていました。

上陸した場所には、現在も記念の標柱が建てられています。幸いに、乗船者に病人も無かったのでしょうか、思いのほか早い下船となりました。またまたDDTの洗礼を受けて、検疫も大学生などの奉仕による簡単なものだったようです。兄は敗戦国の若者として、下船に際してはせめてもの矜持として、京城大学の角帽をかぶって検疫に臨ん

でいました。幸運にも、そこにおられた京城大学の関係者に、今後の指針を受けることなどができて良かった、と言っていました。

特に下船後、一人一人に配られた「おむすび」のおいしかったことは、今でも忘れられない語り草となっています。そして、援護局から幾ばくかの現金と、引揚証明書と各種の切符を渡されて郷里への汽車に乗りました。その日は四月十二日、家族全員の無事の帰国となりました。

私たちは、農家の長男である父の家に帰りました。祖父母や疎開の生活を続けていた叔母たち二家族、そして私たちと総勢十五人の生活が始まりました。食糧不足の時代ですから、食べ盛りの七人の人間が増えたことは大問題だったと思います。最終的には、同じ敷地内に三所帯別々に暮らすようになりましたが、今考えてみると、母の苦労は身心共にここからが始まりだったと思います。敗戦に因る無一物の帰国、舅、姑、そして小姑に囲まれて、生まれて初めての百姓仕事でした。三歳

にして実母と死別し、その後は叔父さんや叔母さんたちにかわいがって育ててもらったということでしたが、地主の娘として育てられた、小柄な母にとつては、大変な労働の毎日だったと思います。

我が家は、江戸末期に築かれたという高い石垣の上にあつたので、周りが一望できませんでした。学校から帰つて来ても、母がどの辺りで野良仕事をしているかを見付けられ、母を迎えに行つたものです。私たちに食べさせるため、黙々と働き続けた当時の母の苦衷など、子供だった私には到底推し量れませんでした。多くを語らない人でしたが、心の中にはどんな風が吹いていたのでしようか。そのころよく聞いていたラジオからは、母と同郷の松島詩子さんの歌声が流れていました。母からは、「本当は音楽学校に進みたかつたけれど、視学官の父にどうしても許してもらえなかつた」と聞かされたことがあります。

父もまた、税理士としての仕事の傍ら農業にも精を出して、私たちを学校に行かせてくれました。

みんな質素だったけれど、学生生活は活気に充ちていました。兄は医師に、姉と私は教師に、妹は栄養士の資格を得ました。そして脱出行で、私と手をつないで泣きながら歩いた弟は、父も好きだった剣道を、中学、高校、大学と続けて、東京大学を卒業しました。企業を退職した今も、他の仕事と共に全日本剣道連盟のお手伝いをしています。父は西東三鬼の「酔ひてぐらぐら枯れ野の道を父帰る」を彷彿とさせる人でしたが、タバコと読書を好み、亡くなる直前まで本の注文の指示をしていました。私たちが子供のころは、夕方バスを降りて橋を渡ると、我が家に向かって手を挙げ「おい、今帰ったぞー」と大声で呼びかけていました。

既に、父も母も他界して随分と歳月が経ちました。私自身も古希を過ぎました。兄は親友だった三谷さんを亡くしてから十余年、昨年は久しぶりに、山陰の町にある専応寺のお墓にお参りしたと言っていました。私も、幼いときからの仲良しだ

った布施和子さん（旧姓森）の早い訃報に驚き、竹内玲子さん（旧姓葭浜）と西所沢のお宅をお訪ねしたことを思い出します。そして、引き揚げて十数年も過ぎたころ、私の心に夢の世界を与えてくれた「千代紙」を、当時の同級生だった高木芳子さん（旧姓立石）が鎌倉からたくさん送って下さったことも、嬉しい思い出となっています。

たどれば敗戦というエポックに、私たちは波乱と苦難の生活を余儀なくされました。当時は、雨でも降ろうものなら裸足で登校するといった物の無い生活や、野草やつるを取った親芋をも食べなければならぬような、厳しい状況でした。だけれどもがまず「生きていること」こそ、最重要課題でした。しかし、半世紀以上も過ぎた今では、記憶も風化してしまったのでしょうか、特に「不幸だった」という思いはありません。

それでも戦争中に鼓舞された「忠君愛国」の美名に、領けない死に方を強いられ、そして「愛別離苦」の悲しみや、「天涯孤独」の時代を生きねば

ならなかった多くの人々がいたという事実を、忘れてはならないと思っています。

そして私自身のことでは、あの空襲警報のサイレン音の怯えから「解放された」という自覚ができたのは、戦争が終わって十五年以上も経ってからのことでした。

これまで敗戦やその後の生活について、私はあまり触れたことはありませんでしたが、この度高知県の村上先生のお勧めや、いっぞや新聞で読んだ、作家 早乙女勝元氏の「語り継ぎいよいよこれから」の記事に共鳴してペンを執りました。私の体験した過去の出来事が、歴史のページとして、素敵な若い方々への何かのメッセージになれば幸いです。